

[論文]

初期ウスタシャ運動における民族共同体思想のファッション化 ——ミレ・ブダクとフィリップ・ルカスによるプロパガンダ——

門間 卓也

はじめに

クロアチア民族主義を核として1930年頃より活動を開始した政治組織のウスタシャは、その最大の目標としてユーゴスラヴィア王国から独立しての民族国家建設を掲げていた¹。もともとユーゴ王国内では議会政治期よりセルビア民族政治家とクロアチア民族政治家の間で国家統治体制を巡る「民族問題」が浮上していたが、1929年に敷かれた国王独裁制に基づき「上から」の国民統合政策が進められたことで、クロアチア民族内の急進派からより強い反発が引き起こされることになった²。ウスタシャはクロアチア民族社会においてそうした政治潮流の変化が生じる中で結成され、右の目標を実現するためユーゴ国王の暗殺に代表されるテロルから大衆層へのプロパガンダまで幅を持った活動を展開した。さらに枢軸国側との協力関係を築いたことで、ナチ・ドイツによるユーゴ王国占領に伴い1941年4月に傀儡国家として誕生したクロアチア独立国では政治運営を担うことになる。これをもってウスタシャの当初の政治目標は達成されることになった。本稿はこうしたウスタシャの戦間期における民族国家樹立に向けた活動を総称して「初期ウスタシャ運動」と呼び、この政治運動が推進される基盤となった民族主義的イデオロギーが先鋭化される過程について論じるものである。

一般的に歴史学の領域でウスタシャは、その政治的性格からファシズム組織であったと見做されている³。ファシズムの定義は研究者間でも未だ議論の対象とされているものの、スタンリー・ペインの分析に基づけば基本的特徴としてウルトラ・ナショナリズム、極端なエリート主義、指導者原理、方法及び目的としての暴力の使用の肯定などの要素が挙げられる⁴。初期ウスタシャ運動のイデオロギー内部にも同様の要素を散見することは可能だろう。例えばクロアチア民族の独立国家建設の希求には民族主義の発露を確認することが出来る。但し本稿ではこうした運動のファシズム的性格に関する分類ではなく、クロアチア社会における運動自体の先鋭化がいかなる思想潮流を背景に導かれたのか問うことに主眼を置く。初期ウスタシャ運動に関する研究は一定の蓄積を持つが、そのイデオロギー的特徴については主にイタリアのファシズム又はナチ・ドイツの国民社会主義からの影響が指摘されてきた⁵。確かにウスタ

シャがその活動初期から両国の政治運動に追随していたことは否めない。しかし自民族の大衆層に対するイデオロギーの浸透が目指される場合、ウスタシャのイデオロギーにも「外部」からの借用ではない政治思想の発揮が求められたのではないだろうか。だとすれば、そのイデオロギーの分析もより内在的な視点から行う必要があるだろう。

拙稿ではこの趣旨に照らして、当時クロアチア民族の間で主たる共同体思想となっていた農民主義に注目する。農民主義はユーゴ王国期における野党第一党であるクロアチア農民党の綱領であり、クロアチア民族の大半を占める農民層を政治的共同体としての民族の支柱と捉える思想であった⁶。農民党はこの主張を背景にユーゴ王国期を通じてクロアチア民族の最大支持政党足り得ることに成功した。そしてウスタシャのイデオロギーはこの農民主義と類似した思想を積極的に展開していたことが知られている。従来の研究ではそうしたウスタシャによる農民主義の援用は単なる政治キャンペーンの方法であったとも見做されているが⁷、但し本稿の焦点はその真偽ではなく、農民主義のプロパガンダの取り込みによりウスタシャのイデオロギーがいかなる形で先鋭化を遂げたかという問題に存する。つまり初期ウスタシャ運動における農民主義の援用について分析することで、その民族共同体思想のファッション化の形態をより詳しく論じることを目指す。

分析の射程と意義

小論で初期ウスタシャ運動の民族イデオロギーについて分析するにあたり、ユーゴ王国期におけるウスタシャのプロパガンダの促進に大きく貢献したと思われる二人の人物の言説に焦点をあてる。

まず初期ウスタシャ運動において最高指導者たるアンテ・パヴェリチ⁸に次ぐ存在であり、ユーゴ王国内の親ウスタシャ派に人気を博した政治家ミレ・ブダク⁹を取り上げる。ブダクは度々農民主義と類似して農民層を政治的共同体としての民族の代表と捉えるような言説を展開しており、ウスタシャ運動における農民主義の取り込みを考える上で重要なイデオロギーだと言える。次に親ウスタシャ派に与する右派知識人の代表的存在であった地理学者フィリップ・ルカス¹⁰を取り上げる。ルカスはクロアチア民族にとり大戦間期を通じて最大の文化組織であった「クロアチア中央協会 *Matica hrvatska*」の会頭を1929年からクロアチア独立国が崩壊する1945年まで務めた人物である。ウスタシャは大衆的基盤の確立に失敗する一方で右派知識人層に支持を拡大していったとされるが¹¹、クロアチア中央協会はルカスの先導もありウスタシャの支持母体として運動の推進に少なくない役割を果たしたものと思われる。

本稿ではブダクとルカスが詳らかにしたプロパガンダ的言説を主たる分析の素材とする。初期ウスタシャ運動と農民主義の接点について問う上では、後述するように大

戦間期を通じてイタリアに亡命していたパヴェリチとは異なり、ユーゴ王国という政治的現場における「当事者」であったブダクヤルカスのような存在が発揮したイデオロギーの実態を見るのが肝要ではないだろうか。また両者共に初期ウスタシャ運動の推進に大きな役割を果たしたことは確かであっても、単なる急進的民族主義者と同定されるべきか否かは明らかではない。ブダクは政治家であると同時に農民層を主題にした小説の執筆で知られる作家であり、親ウスタシャ派に留まらずその作品は当時クロアチア人作家たちの間でも高く評価されていた¹²。またルカスはそもそもウスタシャには属さず、あくまで地理学者あるいはクロアチア中央協会会頭として政治的含意を伴った言説を展開していた。であるならば、彼らはパヴェリチのように当初から初期ウスタシャ運動のイデオログであった訳ではなく、むしろ運動に取り込まれる形で自らの政治姿勢を先鋭化させていったものと考えられる。そのため彼らの言説上に現れた変容は、運動自体のイデオロギーが先鋭化する構造とその結実をより詳細に表しているのではないだろうか。

1. ウスタシャ綱領

まずウスタシャの結成に伴い作成された綱領文書を取り上げる。運動の出発点において農民主義との接点がいかなる形で提示されたか見ることで、その後のファッション化に至る道筋を明確にしたい。

ユーゴ王国では1929年1月より民族問題の解決を目的に国王アレクサンダルによる独裁制が開始された。もともと建国にあたっての思想的基盤は主要構成民族となったセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を同一の「ユーゴスラヴィア民族」に含まれる支族として捉える「ユーゴスラヴィア主義」にあった。但しこの政治思想に基づきセルビア王国に出自を持つセルビア民族政治家が中央集権体制の構築を推進したことで、それまでハプスブルク帝国支配下にありながら一定の自治権を維持していたクロアチア民族は議会の廃止など自らの政治的権利が侵害される事態を被った。そのため次第にクロアチア民族政治家の間でも「ユーゴスラヴィア主義」及びそれを掲げたセルビア民族政治家に対する反発が生じることになる。この民族間の対立は議会政治期における政党間の交渉を通じて様々な形で解決が試みられた。しかし1928年6月に王国議会内で当時農民党党首の地位にあったスチェパン・ラディチがセルビア民族政党かつ与党であった急進党の党員に銃撃され、その負傷のために死亡するという事件が発生したことで、クロアチア民族政治家内からはユーゴ王国を離脱して自らの民族国家を建設するべきだという政治的要求が公言されるようになった¹³。

後にウスタシャの最高指導者となるアンテ・パヴェリチは、当時の保守右派政党であるクロアチア権利党の副党首であったが、こうした民族主義的主張を積極的に展開するようになる¹⁴。なお、国王独裁制の施行はクロアチア民族勢力からの分離派の台

頭を抑えて王国内の情勢安定を図るものだったが、それは実際にはクロアチア民族にとり自民族に対する政治的圧力が強まることを意味した。パヴェリチは独裁制開始直後に官憲による摘発を逃れてイタリアへと避難し、同じく亡命したクロアチア民族主義者と結集してムッソリーニ政権の庇護の下にウスタシャを結成する。なお、パヴェリチを含めた亡命者たちは当初からイタリアを中心とした欧州の居留地でクロアチア民族国家樹立に向けたプロパガンダ活動やユーゴ王国の転覆を図るためのテロルの実施を目的とした軍事訓練などを行っていたが、彼らが自らの組織名を「ウスタシャ *Ustaša*」という名称でもって標榜したのは1930年になってからとされる。また、当時「ウスタシャ」とはクロアチア語で「蜂起者」又は「革命者」を表す言葉であったが、組織名として用いられた背景には初期ウスタシャ運動における政治原理の一つである民族国家建設に向けた革命思想があったと思われる¹⁵。

ウスタシャの具体的な行動指針及び運動の形態などは1932年頃に作成された『ウスタシャ-クロアチア革命組織の憲法』で明らかにされており、この『憲法』の発表をもって初期ウスタシャ運動が正式に開始されたとも考えられている¹⁶。『憲法』は「1. 組織の課題」「2. 組織の構成」「3. 構成員」「4. 誓約」「5. 主要機関」と題された5項目に含まれた13箇条から成るが、その第1条に記された「クロアチア革命組織ウスタシャは、武器による蜂起（革命）をもって他者の軛からクロアチアを解放し、クロアチアが全クロアチア民族及びクロアチアの歴史的領土に対して完全に独立した国家となるための任務を持つ」という文言からは、ウスタシャの革命思想及び暴力的性格が色濃く表れていると言えるだろう¹⁷。また1933年には『クロアチア郷土防衛隊の原則』と題した15箇条からなる文書が作成及び発表されているが、この『原則』は『憲法』と併せて初期ウスタシャ運動の思想的基盤となる文書であった¹⁸。

『原則』の条文にはウスタシャの排外的民族主義及び故国ナショナリズムが明らかであるが、まず本論の主題に照らして注目すべきは農民主義に類似した主張を掲げている第13条であろう。

農民はあらゆる生活における単なる基盤や源泉であるだけでなく、それ自らがクロアチア民族を構成するものであり、またクロアチア国家における政権を担い遂行する者である、さらに、クロアチアの血を引くクロアチア国民 (narod) である他の居住者は、農村及び国土に自らの起源や出自だけでなく積年の家系の絆を保持しているため、全てのクロアチア国民 (narod) は一つの民族統合体を構成している。クロアチアにおいて農民の家系の出身でない者は、100に1つもクロアチアの出自であるか血を引くものではなく、移住してきた外国人である¹⁹

ここでは「農民」がクロアチア民族を政治的に統合する中心的存在として象徴的に

扱われていることが分かる。それではここでウスタシャは農民党の綱領である農民主義と全く同一の主張をしているのであろうか。ここであらためて農民主義という政治思想の基本的概念を整理しておきたい。農民党の創始者であるアントウン・ラディチによれば、民衆は社会階層上「旦那衆 Gospoda」と「農民 Seljaštvo」に区分される。しかしクロアチア社会では後者こそ、人口に占める割合が前者を圧倒的に上回っている以上、政治的共同体としての民族を代表する存在だと言える。同時に「農民」は自らの民族文化をもって個別の民族意識を形成するため、クロアチア民族の独自性はその「農民文化」に規定されることになる²⁰。農民主義の思想的特徴の一つはこのように「農民」を主体とした文化ナショナリズムの発揮にあると言えるだろう。

あらためて『原則』の第13条の文言を見ても、そこにナチ・イデオロギーにおける「血と土」の思想的影響や排外的民族主義を読み取れても、文化ナショナリズムについて論じることは難しい。但しこの条文の直前に記された『原則』第12条には、「クロアチア民族は西の文化及び西の文明に属している」とウスタシャの「文化ナショナリズム」が簡潔に記されている。この「文化」「文明」あるいは「西」がいかなる政治的含意を持つものであるのか、この『原則』内部では明らかにされていない。ともあれウスタシャの綱領に現れた民族イデオロギー内部では、その「文化ナショナリズム」の役割に関する接点は未だ曖昧であるものの、農民主義と類似した思想が含まれていることは明らかだろう。それではこのイデオロギーが先鋭化する様子をより詳細に見るために、ユーゴ王国内におけるウスタシャの台頭に至る過程とその政治情勢下の「当事者」であるミレ・ブダクとフィリップ・ルカスが発揮した言説を見ていきたい。

2. 「農民主義」のファッショ化

(1) 初期ウスタシャ運動とクロアチア農民党

ミレ・ブダクは初期ウスタシャ運動における主要なイデオログであると同時に、ユーゴ王国内におけるウスタシャと農民党の関係の変遷に重要な役割を果たしたものと思われる。まず両政治組織の関係について概観した上でブダクの言説に現れた「農民主義」を分析の俎上に載せたい。

ラディチの後継として農民党の党首となったヴラトコ・マチュクは当初民族間の融和のための一時的な措置として国王独裁制を歓迎していたが、次第に自民族に対する政治的抑圧に抗してセルビア民族を中心とする政治体制の改革を要求するようになった。1932年12月には農民党と独立民主党の政党連合であった農民-民主連合及びマチュクが主導する形でスロヴェニア民族政党やムスリム政党を含めた反体制派勢力が結集し、国王独裁制を非難する内容を含んだ「ザグレブ決議」と呼ばれる声明を発表している。なお全5項目から成るこの決議の第2項に含まれた「農民層は集団的概念

として全ての民族文化、経済的生活、社会的構築及び道徳的価値を担う者であり、民族の大半を構成しているため、我々の全ての生活の基盤とならなければいけない」という文言は農民主義を反映したものと思われる²¹。そして当時クロアチア権利党の幹部であったミレ・ブダクもこの決議に召集され調印に加わっている²²。この段階においてブダクは反体制派として農民党と共に国王独裁制に対抗する意思をもっていたと言えるだろう。

ブダクは「ザグレブ決議」が公にされた後に官憲の襲撃から逃れて亡命しウスタシャに合流している。1933年3月には当時同じく亡命中であった農民党幹部のアウトグスト・コシュティチに対して以下の内容の書簡が送られた。「1. 独立して何者にも依存しないクロアチア国家。これが全クロアチア民族の絶対的に求める目標である。そのため他の目標を持つ者がクロアチア民族の意図に沿うことはない。2. このクロアチア国家はクロアチア農民党の綱領に沿って農民国家として、共和国そして可能であれば中立国として組織される。(中略)我々は最初の目標を、かつての政党に関わらず全ての民族の力によって叶えなければいけない。これに関し、郷土(domovina)では敬愛する人々の間に違いは存在しない。皆同志マチェクを絶対的指導者として認めており、それはマチェクがクロアチア農民党党首であるからではなく、解放に向けた普遍的な民族の理想を遂行し体现する人物だからである(以下略)」²³。

このブダクの言葉からは当時ウスタシャが農民党との政治的協力を現実的な選択肢として構想していたことが読み取れるだろう。しかし1934年10月にパヴェリチらが内部マケドニア革命組織と共謀して国王アレクサンダルの暗殺事件を引き起こしたことから、ウスタシャは政治組織として以降の欧州における活動を実質的に制限されることになる。またマチェクは1935年よりセルビア民族政党と共に野党勢力を再編するなど現実的な路線に従って自民族の政治的立場の向上を目指すようになっていた²⁴。その後ユーゴ王国政府はイタリア側と締結した協定に基づきパヴェリチを除くウスタシャの面々のユーゴ王国への帰還を許可しており、ブダクも1938年7月に王国への帰還を果たしている²⁵。ブダクはその直後にマチェクと会談を行い、今後のウスタシャと農民党の政治協力に関して協議を行った。しかし枢軸国側との連携を求めるブダクの要請をマチェクが拒否したことで両政治組織が連携する可能性は潰えることになった²⁶。

ユーゴ王国から離れてのクロアチア民族国家の樹立を強硬に唱えるブダクとは異なり、当時マチェクはあくまで王国内に留まりながらセルビア民族勢力と妥協した上で自民族の自治権を確保することを望んでいたと思われる。1939年に入るとマチェクは王国内部に自治領を設立するべくセルビア人首相との交渉を重ねることになった。そして同年8月に両者の合意が締結され、現在のクロアチア(イストリアを除く)及びボスニア・ヘルツェゴヴィナの一部を含んだ領域上に「クロアチア自治州」が正式

に誕生する。これはあくまでユーゴ王国領域の枠組内に存在する自治領であったため軍事権や外交権は付与されなかったものの、農業、工業、社会政策、司法、教育、内務などが管轄事項とされ、財政上の自立も保証された。また農民党議員が務める知事と副知事を筆頭とする州政府に加えてクロアチア民族の「国家性」の象徴ともいえる議会も復活した²⁷。

ただしこの農民党とユーゴ王国政府との合意に基づくクロアチア自治州の設立に対し、ブダクを中心とするウスタシャの面々とその支持者たちは非難を向けることになった。ブダクは1939年2月から王国内で発行されていたウスタシャの機関紙『クロアチア民族 *Hrvatski narod*』の編集人を務めていたが、このメディアを通じてウスタシャは農民党への対抗姿勢を明らかにしていくことになる。同紙上ではマチュクのセルビア民族及び王国政府に対する妥協的姿勢が強く批判されると共に、クロアチア自治州の領域がかねてよりウスタシャの希求していたような民族の「歴史的領土」、つまりボスニア・ヘルツェゴヴィナ全域に及ぶものでなかったことに強い憤りが表明された²⁸。また同紙はウスタシャに同調してクロアチア民族国家の建設を要求していた右派知識人層、学生層及び農民層の論考も掲載しており、クロアチア民族社会で初期ウスタシャ運動に与する勢力を動員し結集させたようなプロパガンダ的特色を色濃く持つものだったと言える。ブダクらイデオログのプロパガンダに呼応する形で具体化された反農民党勢力の結集は、クロアチア自治州の政情安定を図る農民党にとり大きな脅威と目された。その結果当局による急進的活動家及び学生などの逮捕が相次いだ。同様にブダク自身も1940年2月に拘留処分を受けることになる。また『クロアチア民族』もその政治的性格を危険視されたか同年3月をもって廃刊となった²⁹。

先に見た通り当初ブダクは自らの政治目標に則して農民党との共闘を図っていたが、1930年代末にはその頓挫から同政党への反発を表明するに至っている。次にこうしたウスタシャと農民党の関係の変遷を受けて浮上したブダクの「農民主義」に対する姿勢を見てみたい。

(2) ミレ・ブダクと「農民主義」

まず未だ亡命中の身にあった1934年に発表されたブダクの著作『クロアチア国家の独立に向けて闘争するクロアチア民族』³⁰を取り上げる。この著作は当時のブダクの政治思想を最もよく表すものであったとされるが、その内容は主にハプスブルク帝国統治期よりユーゴ王国期に至るまでのクロアチア民族を取り巻く政治環境について記したものであり、特にユーゴ王国において同民族の政治的権利が抑圧されている現状を鑑みてセルビア民族との共存が不可能であること、そしてクロアチア民族国家の樹立というウスタシャの政治目標が訴えられている。さらに自民族が維持してきた

「国家性」がユーゴ王国の下で侵害されるようになったという歴史観に基づき、セルビア民族に対する排外的民族主義及び暴力を肯定する思想といった初期ウスタシャ運動の政治的性格が正当化されている。

ここでは『原則』の第12条の文言に表された「文化ナショナリズム」を考慮して、この著作の末尾に「クロアチア民族のウスタシャ運動」という表題をもって記された以下の文章を見てみよう。

歴史的結果とは以下の通りである。つまりドリナ川の溪谷こそ世界が二分される運命の谷間であり、クロアチア人とセルビア人は存在しない一つの民族としてその向かい合った丘にやってきた。ここに一つのエスニック集団としてやってきても、彼らは完全に正対してかつ分離した二つの異なる世界に定住しているため、いずれ異なる民族に変化するだろう。一つの集合体であったものを維持できないところでは何も連携出来ない。何故ならこうした無慈悲な決裂に至るまで世界、宗教、国家を分けて、全く新しく統合不可能な集団が生起するからである。

ここではただ以下の二つの事のみが有り得る。つまり勝利か破滅である。第三の道は存在しない！火と水は互いに打ち消すことは出来ても交わることは不可能である³¹。

『原則』においてはクロアチア民族が「西」に属する存在である旨述べられていたが、ここでは排外的民族主義に基づき地政学的区分を背景としたセルビア民族との差異が強調されていることが分かるだろう。さらにクロアチアが「西」たるヨーロッパの陣営に属して歴史的に多大な犠牲を払ってきたことが記述された後、以下の様に続けられている。

国家なくしてクロアチア民族にとっての生は有り得ない。これに基づき、クロアチア民族はもう誰かを非難したりせず、自らの下に残された、全ヨーロッパがはっきりと分かるような闘争に向けて団結する。アンテ・スタルチェヴィチのクロアチア民族意識がクロアチア農民を導いている。それは我々にとり次のことを意味する。ステパン・ラディチが唱えた社会的かつ人間的正義の獲得へ全クロアチア民族が動いたのである。これは疑いなく唯一の救済である。但し、今日この二人の民族的天才が収まっている全民族の精神の分身を、1871年の民族蜂起の指導者であるエウゲン・クヴァテルニクの歩みを通じて目覚めさせなければいけない。なぜならそれが解放され完全に独立した国家における民族的個性と農民の社会的権利を保障する唯一の方法だからである³²。

ここでブダクは権利党の創始者であるアンテ・スタルチェヴィチ及びエウゲン・ク

ヴァテルニクと農民党の創始者であるスチェパン・ラディチの政治活動を共にクロアチア民族国家建設に向けた闘争の下に位置付け、その歴史的な延長線上に初期ウスタシャ運動がある旨主張している³³。さらにその闘争を『原則』で示されたように「西」たるヨーロッパの陣営に属した運動として解釈すると共に、「農民」を闘争の主体として提示している。ファシズム運動において民族は国家に統合されると同時に国家に対して奉仕する存在として扱われることは常であるが、ブダクのイデオロギーにおいては「農民」がその役割を担っていると言えるだろう。つまりここでブダクはウスタシャのイデオログとして「農民主義」のファッショ化を行っていると考えられないだろうか。

この問題についてさらに考察を進めるために、続いて『クロアチア民族』に掲載されたブダクの論考「クロアチアの編成に関する幾つかの考え」を見てみたい。そこでは将来のクロアチア独立国家の建設及びクロアチア民族の政治的統合に関して独自の「農民主義」が積極的に打ち出されている。まず冒頭において民族の利益に適うことから国家の重要性が訴えられた後、以下の様に「農民主義」に基づく国家の形態について解説されている。

以下のことを自覚しよう。我々にとり民族の過去及び現在そしてその生活の方法が示す己の本来の道を進むことこそ必要である。まず分かるのが、我々の郷土 (Domovina) はほぼ農民の世界から成立しており、その基礎であり強い力となるのが我々の村落に散らばる

農民の家庭

だということである。我々の民族的な幸運、満足、名誉、誇り、信仰及び犠牲的精神たるものは全て農民の家庭 (domovi) の中にある。それ故我々は以下の様な平穏なる分別へ到達した。我々のクロアチアの郷土は民族とその生活のことを考慮すれば、これら全ての農民の家庭の集合体以外の何物でもない。なぜなら我々にはその言葉の正しい意味での労働者階級が存在しないからである³⁴。(太字部分は原文での大文字表記)

ここでブダクはウスタシャの最大の政治目標である国家建設の優越性を説くと共に、反共主義を示唆しながら国家の最小単位として「農民の家庭」を措定している。そしてこの「農民」と「国家」の結びつきは同論考中の以下の様なレトリックでもってより鮮明に表現されることになる。

農民の民族－農民の国家！

これが我々民族の置かれた状況と必要、そして近代的な時代精神に対して価値ある理解と評価を行っている全ての者にとり唯一可能な基盤であり正しい目標である。

農民の国家という概念の重要な内容は以下のように理解される。我々の場合農民である民族は、国家やその国家を自らの牛飼いや資産でもって作り上げた人々のおかげで生活しているわけではなく、国家を自らの手で自らの必要から建設したのである。農民が国家の重荷を全て背負うことになる。何故なら国家を構成する農民以外にその重荷に耐えられる者はいないからである。但し農民が全ての権威をその手に収め、全ての国家組織は農民の必要と要求に従って構成される。まずこの原則に即して全ての法律、学校教育、市場及び運輸政策、又他の全ての国家行政部門が整備されるべきである。

しかしながら、いかに最良のものでもこれらの機構のみでは国家自体の農民的特徴を保証するものとはならないだろう。これはただの衣装であり、それを十分な肉、筋肉、血管で覆う必要がある。これは我々の農民の家族と家庭を基礎とした全社会的、国家的、そして総じて公的な生活の配置により首尾よく達成することが出来るのである。このことが健康的で力強く、その隅々に至るまで人間的かつ進歩的な我々の唯一の基礎である³⁵。(太字部分は原文での大文字表記)

この引用部分ではやはり「農民」を「国家」の基底として捉えながら、求める「国家」像を身体メタファーを通して幾分審美的に描いている。先に述べたように当初農民党が掲げた農民主義の枠内では、「農民」は社会的支配者層であった「旦那衆」と対比させる形で表されており、そこには経済的弱者としての「農民」を救済する意図があった。もちろんこのブダクの言説上でもそうした農民主義に基づく政治的課題は引き継がれているが、同時に大衆層を国家の構成要素として還元させるファシズム的な動員のプロパガンダが展開されていると言えるだろう。

以上のようにブダクの言説上で「農民主義」のファッション化が進行していたことが確認出来た。但しここではまだ『原則』の第12条に記されていた「文化」の役割が不問のままである。果たして農民主義に現れた文化ナショナリズムと初期ウスタシャ運動における民族共同体思想のファッション化はいかなる接点を持ち得たのだろうか。この問題を論じるために続いてフィリップ・ルカスの言説へと目を向けたい。

3. 「西」と「東」を巡る文化ナショナリズム

クロアチア民族がまだハプスブルク帝国下に属していた1830年代にイリリア運動と呼ばれる「民族再生運動」が文化面において開始されたが、クロアチア中央協会はその歴史的潮流に属して1842年に設立された。ユーゴ王国における主要な活動もクロアチア民族の文化的隆盛を目的とした出版活動であった³⁶。同協会を構成した会員及びその事業に関わった知識人の政治的背景は大戦間期を通じて左派から右派まで幅広いものであったが、1930年代後半よりルカスに代表される右派知識人層からマチェ

クの政治姿勢に対する反発が強まったものとされる³⁷。さらにその過程で同協会と当時のユーゴ王国内におけるウスタシャの中核との距離も近づくことになった。ブダクはユーゴ王国への帰還後となる1938年末には同協会の会員職に就いているが、これは当時のクロアチア協会内部の政治姿勢がブダクを含めたウスタシャのイデオロギーと接近していたことの証左と思われる³⁸。後述するように当時ルカスが農民主義に対抗するようなプロパガンダの言説を展開していたことを考慮すれば、その政治姿勢を巡って同協会と農民党の間の緊張も高まっていたものと考えられる。実際にクロアチア自治州成立後の1941年初頭には協会内部に新たに委員会が設置されると共に、ルカスの会頭としての職務も停止される措置が下されることになった³⁹。

このようにクロアチア中央協会に属する右派知識人層は、マチュク及び農民党の政治姿勢に疑問を抱く過程でウスタシャと同一の政治勢力という構図の中に合流することになり、クロアチア民族社会内で初期ウスタシャ運動を推進するに至った。それではこの情勢下で流布されたルカスの政治思想はウスタシャのイデオロギーといかなる接点を持つものであったのだろうか。

まずルカスの言説内では早くより「西」及び「東」の地政学的及び文化的区分に基づいてクロアチア民族の独自性を訴える主張がなされていたことが確認出来る。1929年6月にクロアチア中央協会の年次大会で「クロアチア文化の独自性」と題して行われた講演において、ルカスはローマ帝国の分裂期にまで遡りながら、バルカン半島を二分する形で「西」と「東」で異なる文化圏が構築された旨論じながら、その一方でクロアチアの特性は両者に跨る「橋」である旨言及している。

東西の橋としてクロアチアは二つの世界からの配分を獲得している。つまり西の文化的創造により我々の社会的かつ文化的な成長が循環し、人種的かつ言語的起源を持つ東において我々の生物としての基盤となる血統を得ている⁴⁰。

ルカスはこのヨーロッパの東西に跨る両義性こそクロアチア文化の特徴として捉えているものと思われるが、同様の主張は1932年に発表された論考「クロアチア民族の発展に関する諸方向と諸要素」の中にも見て取れる。さらにこの論考で注目されるのは、ブダクが『クロアチア国家の独立に向けて闘争するクロアチア民族』において示したのと同様にアンテ・スタルチュヴィチ及びエウゲン・クヴァテルニクの両者とラディチ兄弟の政治活動の関連が強調されていることであり、同時にルカス独自の民族思想に基づき農民主義に対する反発も伺えることである。

我ら民族の発展において5番目の人的集団が現れたが、彼らは西の文化的志向を有しながらも外国の影響や誘惑の下にはあらず、全く自律した独自性と民族の熱望の上に

自己と民族のプログラムを創造した。スタルチェヴィチとクヴァテルニクが作りあげたのである。

(中略)

基盤は異なれどこの求心的潮流によりラディチ兄弟が始動してクロアチア民族と同一視された農民党の綱領を創造した。

(中略)

その方向性に関してスタルチェヴィチとラディチ兄弟の間に大きな差異は存在しない。しなしながらスタルチェヴィチは農民と旦那衆の間に対立を作らなかつた。彼は全く農民のように生活し、その亡骸を農村にて農民たちと共に埋葬するよう決めさせた。一方でラディチは農民に集団的意識を産み出し、自らの政治活動ではそれに対して奉仕した⁴¹。

まずルカスが記した「5番目の人的集団」という用語は、アントウン・ラディチが農民層を指して用いた「第5階級」という言葉を念頭に置いたものと思われる。但し引用部の末尾でルカスがスタルチェヴィチとラディチ兄弟の活動の差異について言及していることを考慮すれば、単に農民主義に由来する主張が繰り返されているとも思われない。そして以下の部分では農民主義に対する異議が明瞭に表現されている。

但し別の面では確かな事実が知られている。つまり民族とはいかなる社会的序列や階級を表すものではなく、むしろ核としての民族精神、そして手段としての言語を有する社会的かつ道徳的な集団主義のことである。そしてもし偶然ある階級に属さなかつたとしても、誰も自己から逸脱することは不可能であるため民族からも除外され得ないのである。共通の経験により全ての階級間で連帯意識を形成する構成作用が働くことになり、そして同様に共通の精神的要素が作られる。民族は確かに二つの部分から成立しているが、それは旦那衆と農民ではなく、ただ民族に属している者と、その帰属性及び民族と結びついた全ての義務そして苦難と幸運を自覚している者である⁴²。

ルカスにとりクロアチア文化が「西」と「東」を跨ぐ「橋」であることは、その両義性と同時に自律性と社会内部の統一性を保障するものであった。同様にして独自の文化ナショナリズムに基づき、農民主義における「旦那衆」と「農民」を区分した見方は退けられることになったとも考えられる。但しここでは未だウスタシャのイデオロギーとの共通性は明らかではない。この問いに答えるため、次にルカスとウスタシャの中核が関係を深めると同時に、クロアチア中央協会と農民党の間では緊張が高まっていた時期である1938年に発表されたルカスの論考「クロアチア民族の独自性」を見てみたい。ここではそれまでとは異なり、ルカス自身の文化ナショナリズムに基

づきははっきりとセルビア民族を「東」の陣営に位置付けた上でクロアチア民族との共存が不可能である旨強調されている。

我々のもとで、クロアチア民族とセルビア民族は異なる基盤及び空間において、また異なる法的又は社会的整備の下で自ら固有の国家を創造していた。過去に両者の発展は互いに対して収束することはなく相互に分岐していた。一方はエーゲ海の方角で、他方はアドリア海に面して発展してきた。一方はビザンツ帝国の文化的発展の影響下にあり他方は西の陣営にあった。過去には両者が交わり共に国家を建設するという思想が現れたことはなく、両者は向かい合った二つの世界に属して、実際のところ敵対関係もないどころか互いに無関心で分離していた。両者の民族的及び国家的営みにおける歴史的側面は正反対の方向にあった。一方は東に、他方は西に。

(中略)

クロアチア民族は歴史の中で自らが支配する国家を建設し、自らの文化を西に倣い発展させ、固有の歴史文化的形態を築き上げてきた。これに即して、クロアチア民族はセルビア民族と共有する国家の枠組みの中でセルビア民族と同様に支族だったことはない⁴³。

ここでユーゴ王国の体制と「ユーゴスラヴィア主義」に対するルカスの反発は明らかである。ルカスにとり「クロアチア民族の独自性」とはその固有の「文化」であり、セルビア民族との共存が不可能とされる理由は両民族が互いに異質の「文化」を構築している点にあった。但しここでもやはり、ルカスは自らの文化ナショナリズムに則して農民主義に対する異議を唱えていることが注目される。

ここで一連の問いに至るが、それ自体は重要なものではない。何故ならこの問いは異なる民族間に存在するものではなく、不可解な主義原則の結果我々のもとにやって来たからである。その問いとは、誰が民族を構成し、それに合わせて、誰が民族の文化を創造するか、というものである。全社会科学は以下のように回答している。民族は全ての成員に不均衡ながら宿っている自らの精神とその力により自らの文化総体を創造するのである。さらに農民の原始的な文化並びに完璧な作家の手による高水準の文化に言及出来るだろう。しかしまず次のことを自覚しなければいけない。これら全ての創造物は同一の文化の種類のものであり、低水準の文化と高水準の文化を二つの民族主体の表現かのように分別することは出来ない。それらは同一の表現である⁴⁴。

このルカスの主張からは、農民主義の唱えるように「農民文化」を基盤として政治的共同体としての民族が成立するのではなく、全ての成員が民族を成立させるに足る

文化を産み出すことが出来るという考えが確認出来る。つまり民族意識の形成に「文化」が果たす役割を重用視するものの、農民主義と異なりその「文化」を産み出す主体は農民層に限定されていない。それでは、ここでルカスは自らの文化ナショナリズムに則してクロアチア民族社会の全階層に対する動員を行っているのだろうか。下の引用部を見る限り、ルカスはむしろ農民主義に反発しながらエリート層の役割を強調しているように思われる。

民族は大衆のままでは出来ず、生物の体が血管に繋がった筋肉だけでなく頭脳を必要とするように教育を受けた少数者を必要とする。我々はエリートを持たない民族である。そのために民族の成員の大半は大衆より優れた人を大抵嫌い妬む心を持っているのである。エリートを持たずその出現や成長を許さない民族は、エリートがいなくとも農民に依拠して道徳、政策、信仰そして文学的風味でもって統治可能だと考えており、そうした民族は自らの政権の崩壊を必ず招くことになる⁴⁵。

ここでルカスはブダクと同様に身体のアナロジーを用いながら、民族共同体の安定のために「エリート」が必要であると主張している。こうしたエリート主義的言説は、ファシズム思想の基本的特徴を示したものだとも考えられる⁴⁶。ルカスは農民主義に基づく農民党の政治方針やクロアチア中央協会に対する抑圧的姿勢に関し、クロアチア民族社会における知識人層の立場を顧みないものとして危惧したのかもしれない。ルカスが初期ウスタシャ運動へ与した背景にはマチェクの妥協的姿勢への批判があったことは明らかであるが、加えてその言説上にはエリート主義に根差した独自の民族共同体思想が現れることになった。いずれにせよ、ルカスは初期ウスタシャ運動へ合流したことを契機として自らの文化ナショナリズムに基づき民族イデオロギーを先鋭化させていくことになったと言える。

結論

初期ウスタシャ運動内部で発揮された民族共同体思想のファッション化という本稿の議論の主題に関し、ブダクとルカスが展開したプロパガンダ的言説の分析から明らかになった点を以下にまとめたい。

初期ウスタシャ運動の綱領の一つである『原則』には自らを「西」の陣営として捉えると同時に、クロアチア民族社会における共同体思想として広く支持されていた農民主義を模倣するようなイデオロギーが含まれていた。そしてこの二つの要素はルカスとブダク双方の民族共同体思想の内部に異なる形で反映されることになる。まず両者の言説上には、「西」と「東」の地政学的区分に基づきセルビア民族に対する排外的民族主義が共通して現れている。クロアチア民族の思想潮流において、自民族及び

自国の独自性を「橋」やヨーロッパの「防波堤」というレトリックで表象することは珍しいものではないことが知られているが、ブダクやルカスのようにセルビア民族との差異を強調するか「敵」として認識することはクロアチア民族主義者のイデオロギーにおける一つの典型例だとも言えるだろう⁴⁷。

一方で両者の農民主義への対応とそれに基づくイデオロギーの先鋭化の方向性は幾分異なっている。まずブダクは大衆動員のプロパガンダとして、農民主義と同様に「農民」をクロアチア民族の中心に据えるレトリックを用いていた。そこで「農民」と「国家」の結びつきが強調されたことは、農民主義を基盤とした民族共同体思想のファッション化の現れだと思われる。こうした言説は右派思想に見られるような伝統主義の賛美や農民信仰と類似する側面が強いとも思われるが、やはり「農民」を民族国家建設に向けた「闘争」の主体として捉えるブダクの政治姿勢には、それまでのクロアチア民族の農民主義に基づくナショナリズムとは隔絶したファシズム的傾向が伺えるとは言えないだろうか。これに対してルカスはむしろ農民主義に異議を唱える形で自らのイデオロギーを先鋭化させることになった。ルカスは文化ナショナリズムを支持しながらも、農民主義とは異なり民族意識を形成する「文化」の担い手を農民層に限定せず、全社会階層に開くように主張した。さらに民族共同体の統合に関する「エリート」の役割が強調されることになった。これはファシズムの基本的特徴の一つであるエリート主義の思想に類似したイデオロギーであると思われる。ブダクとルカスの掲げた大衆層へのプロパガンダとエリート主義のイデオロギーは初期ウスタシャ運動においてファッション化された民族共同体思想の特徴として、クロアチア独立国における思想潮流の構築に引き継がれることになるだろう。

最後に所謂ファシズム運動の全般的動向から初期ウスタシャ運動の特徴について指摘してみたい。前述したように、ウスタシャのイデオロギーの特徴はイタリアのファシズムやナチ・ドイツの国民社会主義の影響から論じられることが多い。一方で初期ウスタシャ運動の経過を見ると、パヴェリチを含めた亡命者たちの活動に始まり、1930年代後半にはそれと併せてユーゴ王国内での帰還者たちの活動が開始されたことが分かる。これら二つの活動内部の思想潮流は決して区分されるものではないが、本稿では農民主義との接点に注目することで後者のイデオロギーの先鋭化について内在的な側面から分析することに主眼を置いた。但し、農民主義自体は確かにクロアチア民族社会内で形成された政治思想であるが、大衆層へのプロパガンダを目的とした農民あるいは農村信仰は、ナチ・ドイツにおける「血と大地」の理論のように、ファシズム思想に共通して現れるイデオロギーだとも言えるだろう。また「西」に限らずクロアチアと同様に「東欧」のファシズム運動の一つとも考えられるルーマニアの場合を見ても、その運動の初期にはやはり大衆動員に係る農村キャンペーンが実施されていたことが分かる⁴⁸。

確かにブダクの言説自体を見る限りでは、そこにファシズム思想に連なる新規的なイメージが提示されているとは言い難い。しかし本稿で特筆したいのは、ブダクやルカスの民族共同体思想の先鋭化がファシズム思想の類型的な産物であっても、それは初期ウスタシャ運動に対してユーゴ王国内で参画した「当事者」である彼らが、農民党や農民主義との接点を通じて形成した結果だということである。つまり「外部」からの直接的な影響によって初期ウスタシャ運動の民族共同体思想のファッショ化がもたらされたのではなく、むしろ「内部」たるユーゴ王国の政治情勢下に現れた対抗関係に基づき「当事者」のイデオロギーと「外部」のファシズム思想が連結する、という思想形成の構造が存在していたと言えるだろう。

こうした初期ウスタシャ運動の思想潮流に見られたダイナミクスは、傀儡国家のクロアチア独立国という「外部」たるナチ・ドイツやイタリアの影響力が増した上で「内部」の体制と混在するという混沌とした状況下で、より鮮明に現れるものと予期される。本稿では初期ウスタシャ運動と農民主義の接点に焦点を当てたため、民族共同体思想としても「統合」の在り方に関するイデオロギーの一端を明らかにするにとどまった。クロアチア独立国期には政治概念としての「民族」の在り方を巡り、ウスタシャのイデオロギーはさらなる転換を迎えることになると思われるが⁴⁹、その分析は今後の課題としたい。

注

¹ 1918年12月に建国された「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」は1929年1月の国王独裁制開始に伴い国名を「ユーゴスラヴィア王国」に改称した。以降の本文では煩雑さを避けて同国名を「ユーゴ王国」と記す。

² 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店、1996年、58-70頁。

³ Stanley G. Payne, “Nezavisna Država Hrvatska u usporednoj perspektivi,” in Sabrina P. Ramet, ed., *Nezavisna Država Hrvatska 1941.-1945.* (Zagreb: Alinea, 2009), pp.22-8.

⁴ Stanley G. Payne, *A History of Fascism, 1914-1945*, (London: Routledge, 2001), pp.14f.

⁵ Payne, “Nezavisna Država Hrvatska,” p.22.

⁶ クロアチア農民党はハプスブルク帝国統治下でアントウンとスチュパンのラディチ兄弟により1904年に結成された。当初の党名は「クロアチア人民農民党」であったが、1920年に「クロアチア共和農民党」、1925年に「クロアチア農民党」へ変更されている。以下では煩雑さを避けるために「農民党」と統一して記す。同政党の綱領である農民主義については、以下を参照。越村勲『東南欧農民運動史の研究』多賀出版、1990年、69-89頁。Mark Biondich, *Stjepan Radić, the Croat Peasant Party, and the Politics of Mass Mobilization, 1904-1928* (University of Toronto Press), pp.245-7.

⁷ Fikreta Jelić-Butič, *Ustaše i Nezavisna država hrvatska, 1941-1945* (Zagreb: Liber, 1977), p.191.

⁸ Ante Pavelić (1889-1959)。ウスタシャの設立者であり最高指導者。ヘルツェゴヴィナ地方の農村に生まれ、幼少期をボスニア・ヘルツェゴヴィナ地域で過ごす。1915年にザグレ

- ブ大学で博士号（法学）取得。クロアチア権利党（注 14 参照）幹部。国王独裁制開始以降はイタリアに亡命していたが、1941 年 4 月にクロアチア独立国が誕生するとザグレブに帰還して政府首相の地位に就く。1945 年 5 月にクロアチア独立国が崩壊すると再び亡命してアルゼンチンに居留した。 *Tko je tko u NDH, Hrvatska 1941.–1945.* (Zagreb: Minerva, 1997), pp.306–10.
- ⁹ Mile Budak (1889–1945). 現在のクロアチア中央部の山岳地域であるリカ＝セーニ県に生まれる。サラエヴォでギムナジウム修了。第一次世界大戦ではハプスブルク帝国軍に従軍。法学を修めた後アンテ・パヴェリチの下で弁護士修習生として勤めたことから関係を深める。クロアチア権利党（注 14 参照）に入党し、パヴェリチの亡命後は幹部を務める。クロアチア独立国では教育大臣、在独全権大使、外務大臣などを歴任。同国崩壊後にバルチザンの軍事裁判で死刑に処される。 *Tko je tko u NDH*, pp.53–5.
- ¹⁰ Filip Lukas (1871–1958). 地理学者、クロアチア協会会頭、経済商業高等学校教師。クロアチア独立国崩壊後に亡命してローマで客死。 *Tko je tko u NDH*, p.293.
- ¹¹ Jelič-Butič, *Ustaše i Nezavisna država hrvatska*, pp.42ff.
- ¹² Ivo Petrinović, *Mile Budak-Portret jednog političara* (Split: Književni krug, 2002), pp.76–80.
- ¹³ 拙稿「『第一のユーゴスラヴィア』における『暴力の文脈』 – 議会闘争内部におけるナショナリズムの政治的機能 (1918-1928 年) –」『ロシア・東欧研究』41 号、2012 年、91–107 頁。
- ¹⁴ クロアチア権利党は 1919 年に設立され、アンテ・スタルチェヴィチ（注 33 参照）の「国家性」の思想の受け継ぐ形で綱領としてクロアチア国家樹立を掲げていた。1929 年 1 月に国王独裁制開始に伴い党活動停止。なおパヴェリチやブダクを始め多くの党員がウスタシャに参画した。
- ¹⁵ Mario Jareb, *Ustaško-domobranski pokret, od nastanka do travnja 1941. godine* (Zagreb: Školska knjiga, 2006), pp.112–5.
- ¹⁶ *Ibid.*, pp.115f.
- ¹⁷ *Ibid.*, pp.122f.
- ¹⁸ なお、これらの文書がユーゴ王国内で公表されることはなく、当時亡命の身に在ったウスタシャの面々の間で機関紙を通して共有されていた。
- ¹⁹ *Ibid.*, p.128. なお、クロアチア語の「narod」を日本語に置き換える場合、「国民」「民族」「人民」など多様な含意を持ちうる。ここでは「国民」と訳したが、以下の引用で特に注釈が無い場合は、原文での「narod」は全て「民族」と訳出している。また「国家」と訳出されている際の際の原語は「država」である。
- ²⁰ 越村『東南欧農民運動史』84–7 頁。
- ²¹ Ferdo Čulinović, *Jugoslavija između dva rata*, vol.2 (Zagreb, 1961), pp.56–7. なお、独立民主党及び農民 - 民主連合については以下を参照。拙稿「『第一のユーゴスラヴィア』における『暴力の文脈』」 pp.99–105.
- ²² Tomislav Jonjić and Stjepan Matković, *Iz korespondencije dr. Mile Budaka (1907.–1944.)* (Zagreb: Hrvatski državni arhiv, 2012), p.54.
- ²³ *Ibid.*, p.276.
- ²⁴ Hrvoje Matković, *Povijest hrvatske seljačke stranke* (Zagreb: Naklada Pavičić, 1999), pp.356ff.
- ²⁵ 当時イタリアやナチ・ドイツからユーゴ王国に帰還したウスタシャの亡命者の人数は約

260名とされる。イタリアには約250名が残留したが、その多くはパヴェリチと共にクロアチア独立国誕生まで居留を続けた。また正確な数字は不明であるが、ユーゴ王国末期の国内にウスタシャ・グループは約2000名存在したとされる。Jelič-Butič, *Ustaše i Nezavisna država hrvatska*, pp.45–6, 55.

²⁶ Matković, *Povijest hrvatske seljačke stranke* p.372.

²⁷ 石田信一「クロアチア自治州に関する一考察」『跡見学園女子大学文学部紀要』第41号、2008年、22–25頁。

²⁸ Željko Karaula, “Mile Budak i tjednik *Hrvatski narod* 1939.-1940. godina,” *Dani dr. Franje Tuđmana–Hrvati kroz stoljeća* 1, (2008), p.192.

²⁹ Jonjić and Matković, *Iz korespondencije*, p.98.

³⁰ Mile Budak, *Hrvatski narod u borbi za samostalnu i nezavisnu hrvatsku državu* (Izdanje hrvatskog kola u Sjedinjenim Državama i Kanadi, n.d.).

³¹ *Ibid.*, p.185.

³² *Ibid.*, p.186.

³³ Ante Starčević (1823–1896). Eugen Kvaternik (1825–1871). スタルチェヴィチはクロアチア史において「国父」と称される政治家。クロアチア中世王国の領土再建を目指した「国家性」の政治思想は以後のクロアチア・ナショナリズムの基盤になったとされている。1861年にクヴァテルニクと共に権利党結成。クヴァテルニクは1871年にハプスブルク帝国支配下からのクロアチア国家独立を求めて蜂起したが、短期間で帝国軍により鎮圧された。

³⁴ Mile Budak, “Nekoliko misli o uređenju hrvatske,” *Hrvatski narod*, 1, no.46–47, Božić 1939, p.16.

³⁵ *Ibid.*, p.16.

³⁶ Jakša Ravlić, “Povijest Matice hrvatske,” in Jakša Ravlić, eds., *Matica hrvatska 1842–1962* (Zagreb: Matica Hrvatska, 1963), pp.163f.

³⁷ Višeslav Aralica, *Matica hrvatska u nezavisnoj državi hrvatskoj* (Zagreb: Hrvatski institut za povijest, 2009), pp.73–8.

³⁸ *Ibid.*, p.82.

³⁹ *Ibid.*, pp.13–23.

⁴⁰ Filip Lukas, “Osebnost hrvatske culture,” *Hrvatska revija* 2, no.8 (1929), p.454.

⁴¹ Filip Lukas, “Smjernice i elementi u razvoju hrvatskog naroda,” *Hrvatska revija* 5, no.6 (1932), pp.351–2.

⁴² *Ibid.*, p.352.

⁴³ Filip Lukas, “Hrvatska narodna samobitnost,” in Filip Lukas, *Hrvatski narod i hrvatska državna misao* (Zagreb: Matica hrvatska, 1944), p.74.

⁴⁴ *Ibid.*, p.85.

⁴⁵ *Ibid.*, pp.89–90.

⁴⁶ 山口定『ファシズム』岩波書店、2006年、179–82頁。

⁴⁷ Ivo Žanić, “The symbolic identity of Croatia in the triangle *Crossroads-Bulwark-Bridge*,” in Pål Kolstø, ed., *Myths and Boundaries in South-Eastern Europe* (London: Hurst & Company, 2005), pp.35–76.

⁴⁸ 藤嶋亮『国王カロル対大天使ミカエル軍団 ルーマニアの政治宗教と政治暴力』彩流社、

2012年、51-7頁。

- ⁴⁹ 本稿では扱えなかったものの、ウスタシャの民族イデオロギーの特徴として、ムスリム人を「クロアチア民族」の一員として捉える政治思想が挙げられる。クロアチア独立国が誕生してボスニア・ヘルツェゴヴィナ全土を領域内に収めたことで、この政治思想はウスタシャのイデオロギーにより盛んに流布されることになる。

※本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号:15J08473）の助成を受けた研究成果の一部である。

**The Fascistisation of Ustasha Ideology on National Community in the
Kingdom of Yugoslavia
—The Propaganda by Mile Budak and Filip Lukas—**

Takuya MONMA

This paper explores how political ideas on ‘national community’ were fascistised during the Croatian fascist movement in the Kingdom of Yugoslavia (1929–1941). There were two currents inside the Croatian fascist movement at that time as follows: various political activities of refugees from the beginning of the movement under the leadership of Ustasha and Ante Pavelić and propaganda campaigns in the second half of the 1930s conducted by returnees of Ustasha to the Kingdom of Yugoslavia. This paper focuses on the ideological fascistisation in the latter case and analysing political discourses of the two main individuals who played key roles in order to promote the movement in the Kingdom of Yugoslavia, namely, Mile Budak (1889-1945), vice-leader of Ustasha and Filip Lukas (1871–1958), president of Matrix Croatica, one of the most important Croatian cultural institutions.

During the second half of the 1930s, Croatian society was divided into political groups because of ideological differences among them. On the one hand, the largest national party, the Croatian Peasant Party (HSS) played a significant role in negotiating with Serbian parties in order to recover their own national rights inside the Kingdom of Yugoslavia. On the other hand, extreme rightists, such as the members of Ustasha, being anxious for independence, criticised such political compromises guided by Vladko Maček, the leader of the HSS. United in this ideological opposition, Budak and Lukas became closely tied to each other in confronting Maček and becoming increasingly radical in their ideas on ‘national community’ for the future of the Croatian state.

It is clear that Budak and Lukas shared a national ideology based on geopolitics that divided an imaginary ‘East’ and ‘West’ and placed great emphasis on the otherness of Serbs. However, despite the rivalry with the HSS, Budak employed the key program of the HSS, Peasantism, in his own political discourses for propaganda. According to this program, the ‘peasant’ represented the Croatian nation and the cultural construct of their national consciousness because peasants as a class accounted for the majority of Croats in the Kingdom of Yugoslavia. In his ideology of considering the ‘peasant’ as a nucleus for the struggle to establish the independent state of the Croats, Budak stressed on the importance of the existence of both ‘state’, and ‘peasant family’. This rhetoric was a way of fascistising Peasantism and

advancing the Croatian fascist movement.

In comparison with Budak's modification of Peasantism, Lukas objected to this HSS program because of his own cultural nationalism. His discourse showed an ambition to reorganize a political structure in Croatian society that emphasised the importance of the 'elite' as an important factor in developing a national society for Croats. It seemed that Lukas, as one of the leading intellectuals in Croatian society, was uneasy about the politics of the HSS which took little account of nationalistic claims from the Matica hrvatska institution, which promoted cultural identity in Croatia. This type of ideology, 'elitism', was also the result of the fascistisation of cultural nationalism inside the Croatian fascist movement.

Although these ideologies had a strong resemblance to minimum components of fascism, this study shows how political ideas on 'national community' in the Croatian fascist movement were constructed in an ideological context in Croatian society, which were independent from fascist influences in Italy and national socialism in Nazi Germany.